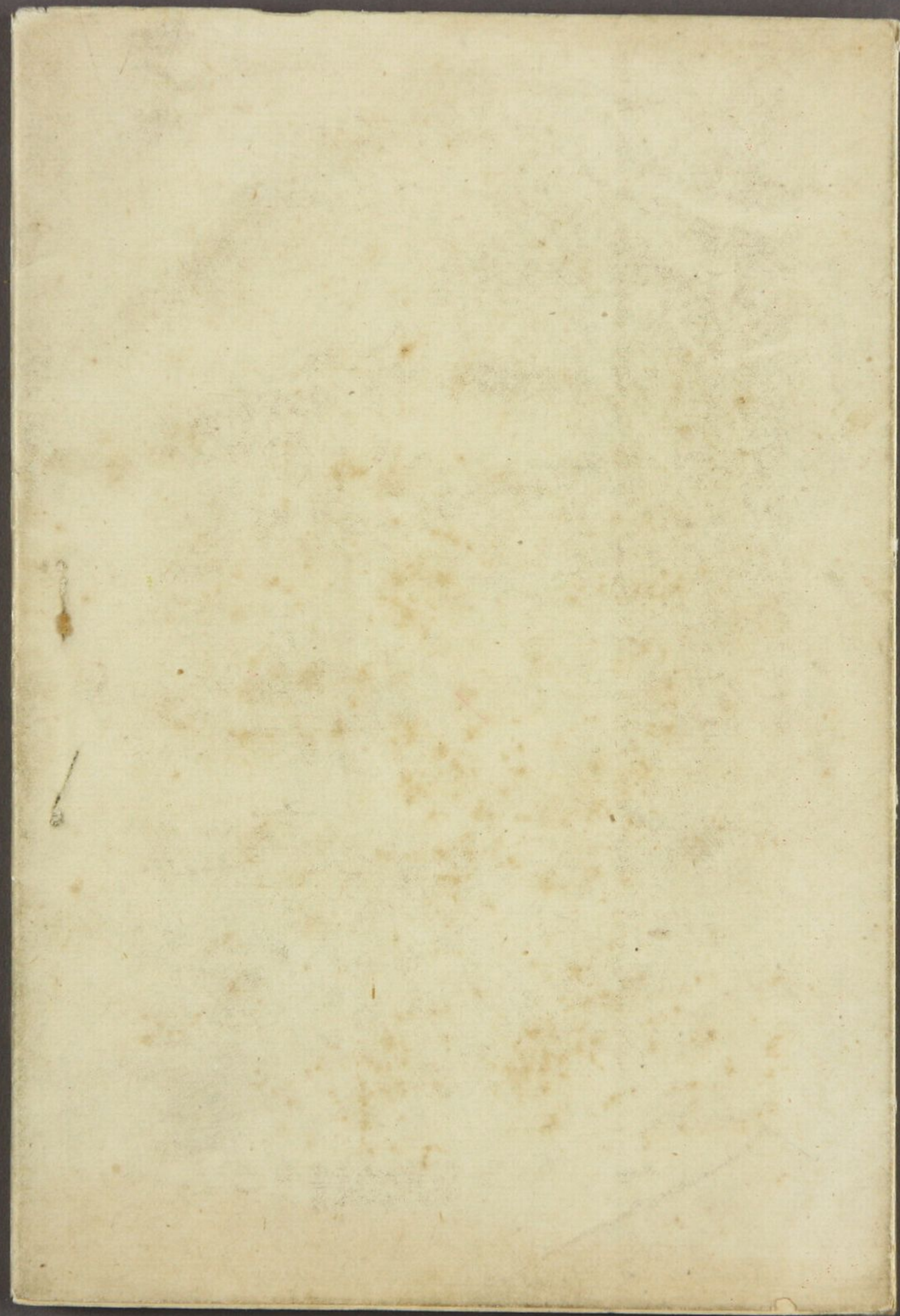


收記書



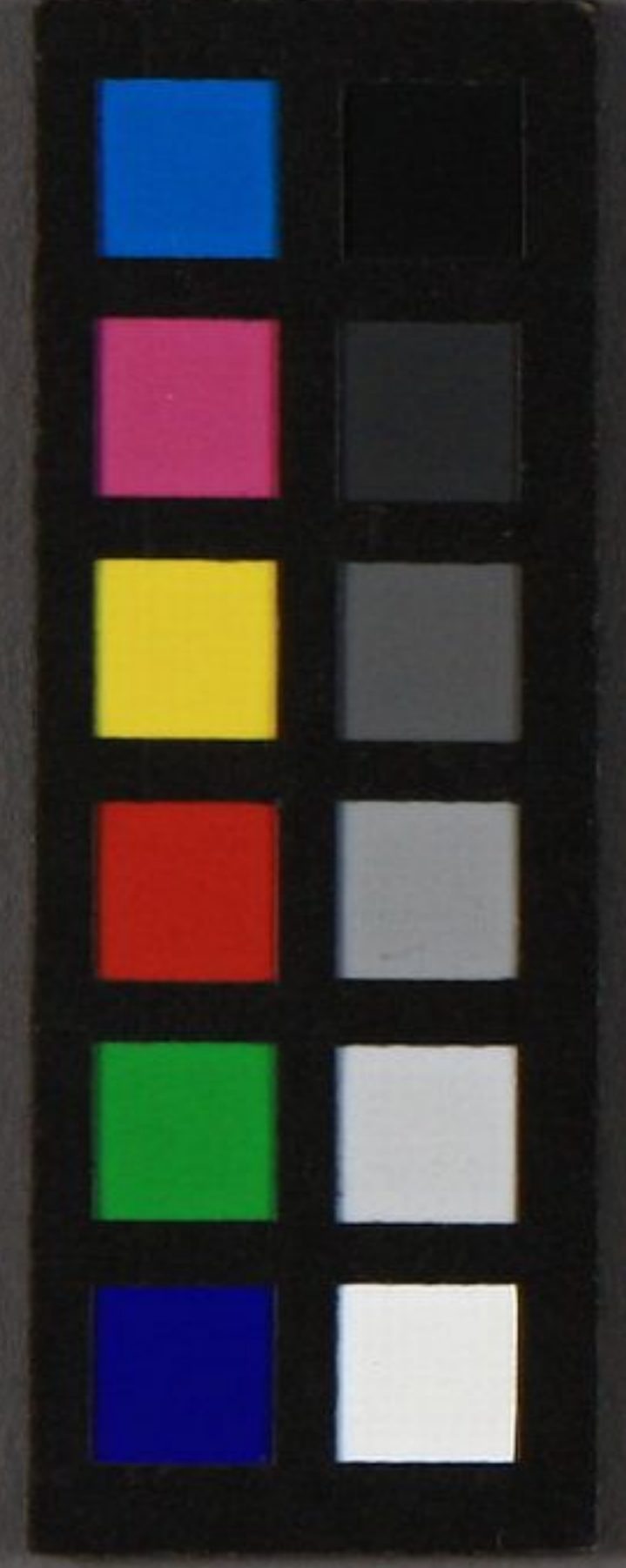






收記書

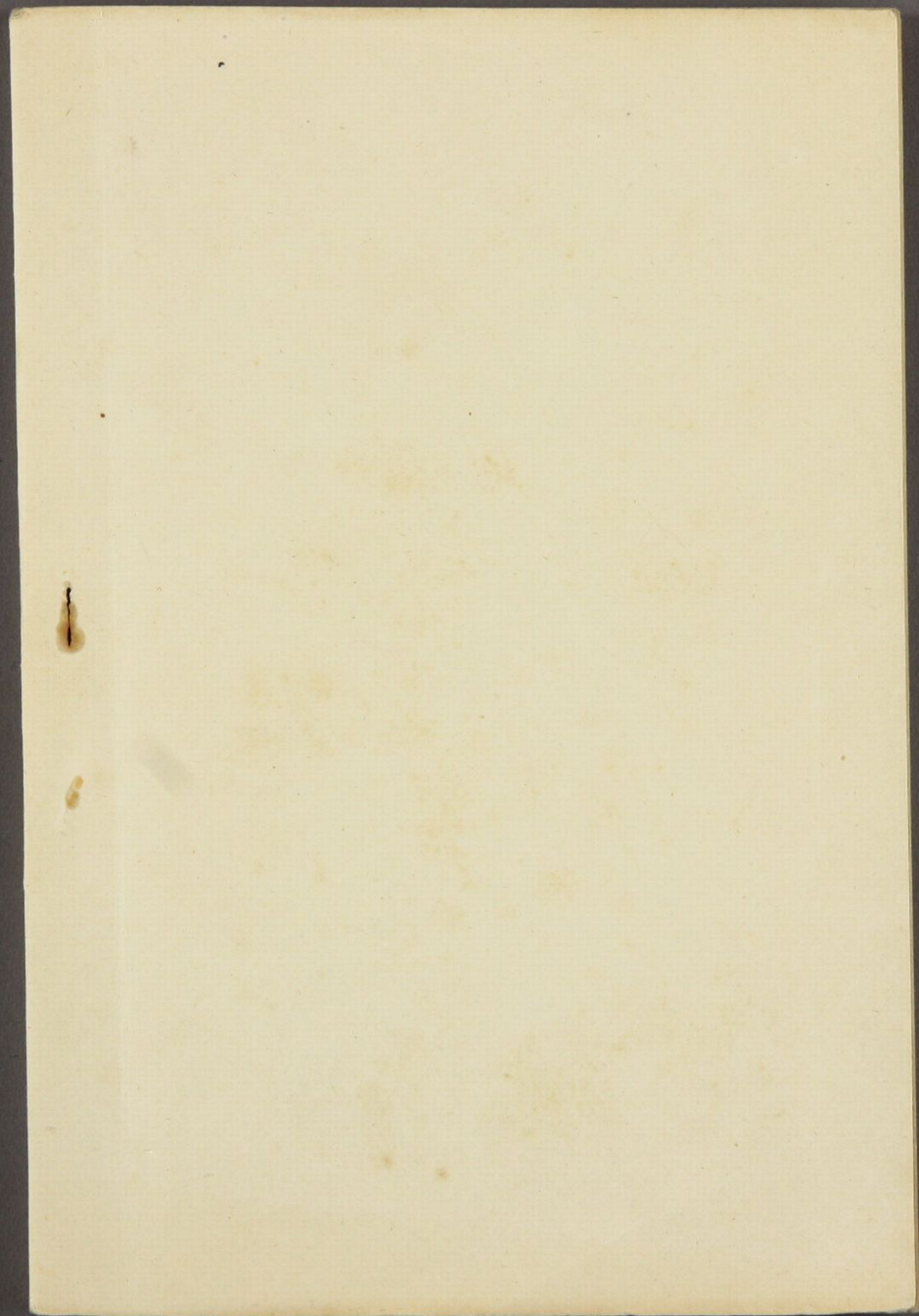




草紙の巻













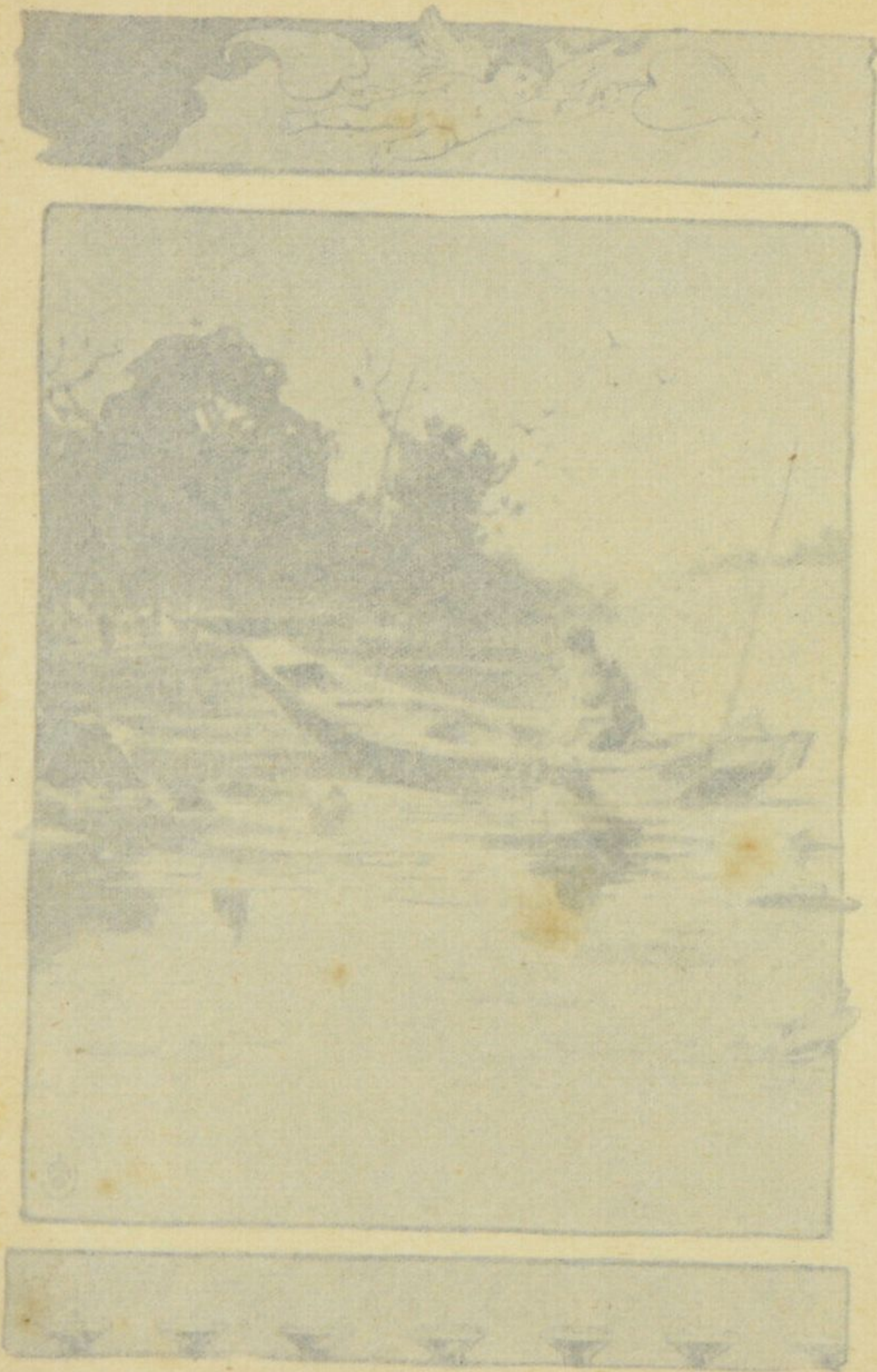
やさしきこころのうちに愛のひそむ
は、森のみどり葉がくれに鳥のすむに
似たりといふなるに、このはかなき草
わかばのかげにはいまだ夢さそふに
ほひもなきがごとく、わが調に慣れぬ
胸のおもひは、色をも彩をもなしあへ
ぬをいかにせむ。



目次

春の歌 一
 日神頌歌 三
 をとめごころ 九
 新譜 一一
 彩雲 一七
 春の野べ 二二
 戀ぐさ 二五
 君やわれや 二九
 牡蠣の殻 三四
 樹蔭 三八
 青野花草 四〇

枳殻 四三
 可憐小汀 四六
 菱の實とるは 五一
 ゆふづつ 五七
 夕かけ 六一
 問ふをやめよ 六五
 夏愁 六八
 かたみの星 七一
 追憶 七三
 かすかに胸に 七八
 草莽蕪頌 八五
 高潮 九〇



袋 表 挿

紙

畫

.....

一條成美筆

畫

.....

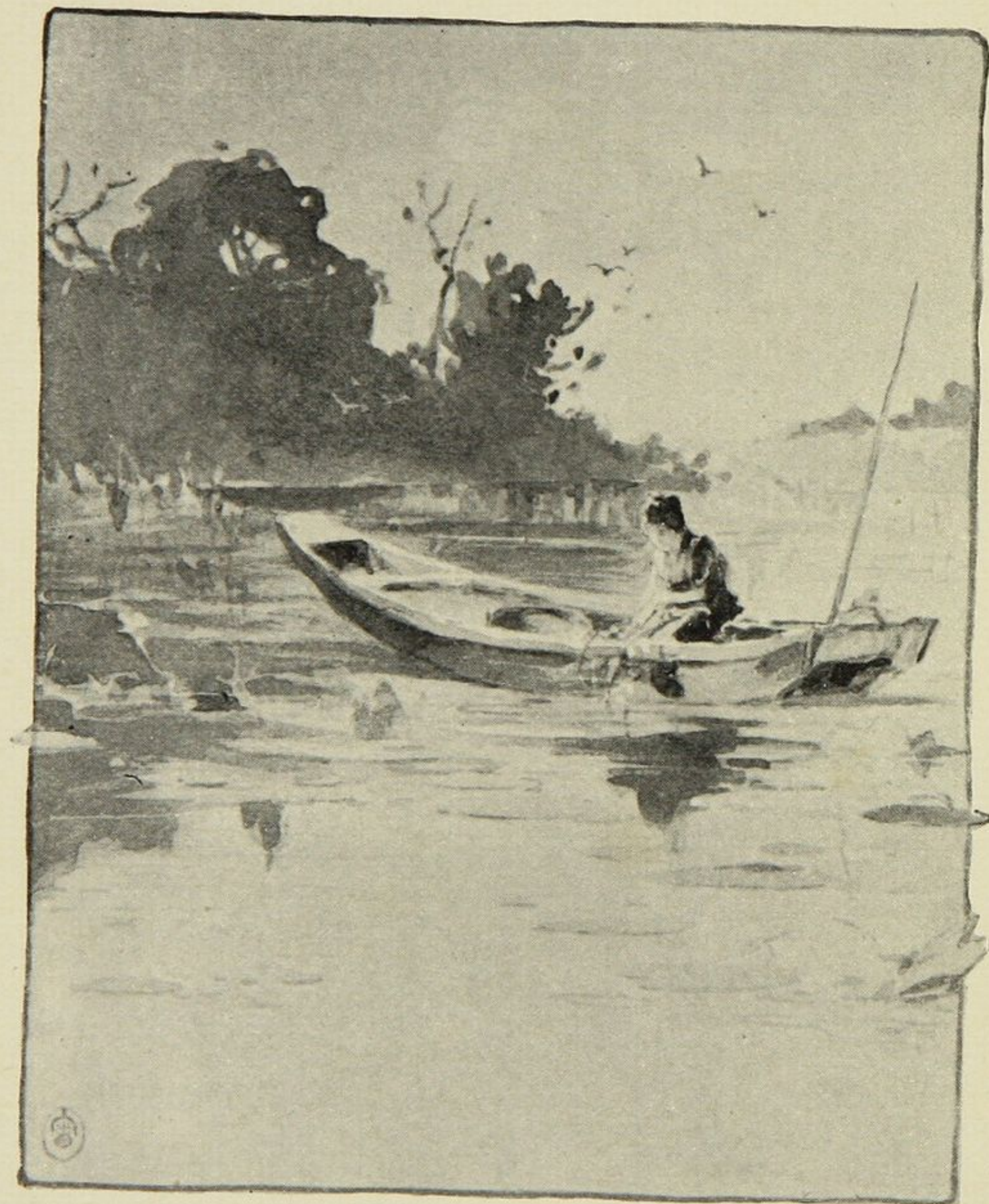
結城素明筆

畫

.....

渡邊審也筆

- (一) 菱の實とるば、誰が子ぞ
- (二) 可怜小汀(鷗に寄する歌)



繪畫

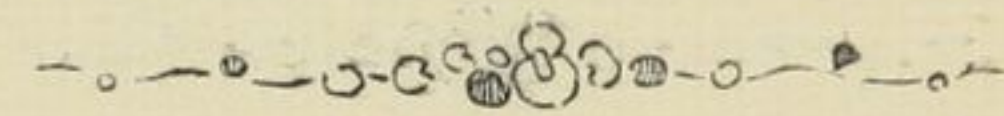
一
條
成
美
兼
結
城
素
明
兼
渡
邊
審
也
兼

草わかば

蒲原有明

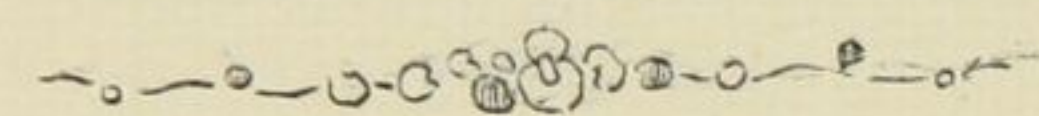
春の歌

歡樂ふかくもえいづる
香を慕ふにも草嫩
細き葉がくれ身をよせて
羞ぢてひそめる花の影



羞ぢてかくるさまながら
 花はほがひのよそほひや
 空には夢のたはぶれの
 虹こそ淡くかかるなれ

唇くちびるを解とく歌の君
 春のたくみの手は高く
 夕にはまた彩いろを織おる
 光は雲にながれけり



日神頌歌

いのちのねざしうるほへば
 ここなる花もかをるなり
 文しづ布り織ります羽は槌づ雄をの
 神の高たか機はたしのめに
 いろあやとくもととなひて
 影かげかすかなり星ほしの梭はたぎ

雲はいと濃き紫に
うすくれなるの糸をぬき
高野路夢の花罌粟の
つぼみひらくる曙や
げにかぎりなきよそほひの
榮あふぐこそゆかしけれ
いとものふりし冬の夜の
幽宮かくれのみやのまゆごもり

もぬけいでては天の原
春の霞のもろつばさ
まだかよはげに見ゆれども
おほはぬ空もなかりけり。
夜の闇消えてゆく空に
見よ白鳩の羽を短きて
にほふ桂の真鹿見矢の
生矢千箭の鞆を負ひ

日女の神は春かへる
かの稚宮にいでましぬ

御統の玉おとたかく

天にきこえて曉の

星の光のゆらぐ時

この世なやめる人の身も

こごえし靈もやわらかき

春の目影にむかへかし

をりこそよけれ常世なる

甘き菓の新釀

瑪瑙の谿にしたれば

わきほとばしる白泡の

にほふがごとくみなざりて

光さしそふ日のみ神

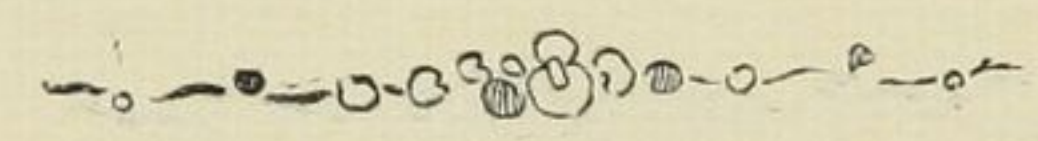
あわうるはしき日靈貴

まだ天地のわかくして

影清かりし朝ぼらけ
遠き光を身にしめて
誰か高市に神集ふ
神のみ聲をこの日傳へむ

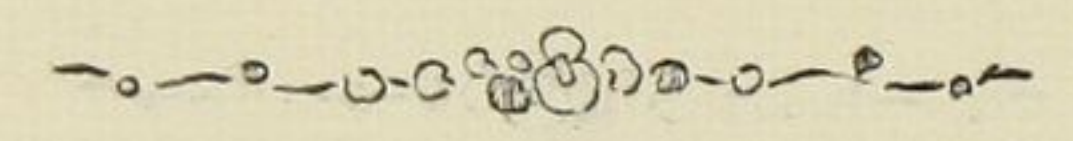
をとめごころ

手にふれたまふことなかれ
うれしき君とおもへども
まだうらわかき野の花は
熱き情の日にたへじ
ゆめふれたまふことなかれ
いといたもろきわが胸に



激浪たちて白珠の
涙くだかばつらからむ

ただふれたまふことなかれ
秘めてぞ清き戀なるを
もしかかる夜に罪やどる
星墜ちゆかばいかにせむ



新譜

其一

おもふに夢に

おもふに夢に誰かわが
手にふれたりや知らぬまに
空はかすめる夢としも
げに春はこそいふべけれ

知らですごしぬこの日まで
その秘めごとを歡樂を
さわれ知りてはやすからず
あわわが胸のいつになく
おもふに誰かめづらしき
たよりを夢に傳へけむ
かしこよりとしたのむにも
あやなく雲ぞかすみたる

嗚呼さばかりに何ゆゑに
あくがるるわがおもひぞや
微草よなれもゆかしげに
もゆるは何の夢ごち
あまふに春にいつこより
遠き調の傳ふとも
幽かなるべき絃にだに
うらわかみこそ觸れもすれ

色し慕へどわりなくも
香をし戀ふれどさながらに
されば少女のわがこころ
寤めてかつひに夢みてか

其二

野路よりひとり

野ぢよりひとりかへり来て
あやしくなぞやはづかしき

髪にかざしし草の花
それさへ秘めてえも見せじ

髪にかざしし草の花

色さへ香さへさとらせじ
見せよと人の強ていはは
しづかに胸にひめてまし

静かにさらば秘めてとか



ああいづはりぬわれながら
 春日^{はる}あまりに楽しくて
 かくこそ胸はさわぐなれ

浪だつ胸にたよりつつ
 花は眠りてあるならむ
 よしや夢みてさめずとも
 つらき人にはえも見せじ

彩 雲

春うらわかき追憶^{おひさ}に
 空のころもかすむ時
 雲は流れて古歳^{ふるとし}の
 よろこびにこそかへるなれ

ああその影のいと淡き
 光に榮^はゆるくろかみの

少女が櫛くしに匂ふごと
輕げにとくるすがたあり

ああそのかげの静けさや
たとへば遠き海原うらに
小島せじまうかびてみゆるごと
愁うれひにさわぐ浪の外

われや野の空うちあふぎ

いつか嘆なげきをわすれけり
なげきよりこそ人沈しづめ
春の彩あざある雲を見よ

さてしも情なまけいと熱あつき
胸のしろきにくらぶれば
げに觸ふれがたきたのしみの
夢かよふなり春の雲

あくがれたちてながむれば
乳の江をゆく船に似て
また見かへせばうまざけの
大海にこそ浮びけれ

誰かおもはむこの時し
なかぞら高き紫の
雲ゆふまぐれ消え去りて
幻影つひにたえむとは

榮ある幸よゆくすゑを
おもひわづらふこともなく
雲もながれて古歳の
よろこびにこそかへるなれ

春の野べ

わかやぐひかり野べのいろ
しらべもかすむ春のうた
あはれこの世にいくちとけ
人はなさけの香を慕ふ
たのしや遠き古の
その日に空の彩を見し

小琴もけふはよろこびの
まためづらしき音にたたむ
暁ひとり消えてゆく
星よ雲の路すてて
しばしは人の世にくだり
めぐらばいかに春の野を
ここには匂ふ若草に

ゆらめくいきもゆるとき
よろこび慕ふ胸にしも
熱きおもひはやどるなり

花野は盾のひとおもて
大神の手のたくみぞと
夢よただへてわづらひの
征矢鳴りやめるかげにかくれむ

戀 ぐ こと

さにてはなきや昨日こそ
冬のあはれはこもりしか
古井のかげよ今日はまた
追憶深き草の花

追憶ふかき草なれば
葦やさしくにほふなり

やさしく匂ふ花なれば
そのころさへ慧からむ

されば知れりや歡樂の

泉にかかると琴のねを
ここには誰ぞ弾きすてて
世はすががきのみだれの

さてしも難きよろこびや

かくも忘れし秘めごとや
いやまし人は嘆く日に
匂ひは深き花すみれ

常磐の緑葉をかさね

森の香いかに高くとも
汝がにほはしのくちづけに
われはかへじよ花すみれ

神のこころはほのかに
人知る際にあらねども
いくよ忘れし思ひさへ
ただこの花に忍ばるる
げに世は夢よ歡樂の
泉はつきてかへらねど
古井のかげの戀草に
なほ新しきにほひあらずや

君やわれや

海に來て戀をおもへば
わか戀はみだるうしほ
君にゆき君にむかへば
わが身たださみしきおもひ
わが情君がなさけに
ふたつもしくらべみるとき

いかでわが青沼の水
君が野のいづみに如かむ

南の花の香か

浪ひびく夢の小笛か

君はこれにほひの身なり

君はまた志らべのすがた

われはまた樹の間の小鳥

君が眼の空にかかれる
うるはしき瞳の星の
色すめるかげをぞたのむ

かくてわが命の甕に

濁汲むひくき流も

君が戀ほのほはげしき
海にこそ注ぎいでしか

君はまた常住のよろこび
緑なるつきせぬ廣野
その廣野君が狩くら
狩くらにわが身迷へり

わがなやみ君がよろこび
わが愁ひ君が琴のね
白銀の獵矢を君は
小男鹿の痛手ぞわれに

君が戀あまりに高く
黄昏も知らぬ光や
浮雲のかげにもあはれ
たふれゆくわが身あよはじ

牡蠣の殻

牡蠣の殻なる牡蠣の身の
かくもはてなき海にして
獨りあやふく限ある
そのおもひこそ悲しけれ
身はこれ盲目すべもなく
巖のかけにねむれども

ねざむるままにおほうみの
潮のみちひをおほゆめり
いかに黎明あさ汐の
色しも清くひたすとして
朽つるのみなる牡蠣の身の
あまりにせまき牡蠣の殻
たとへたづついと清き

光は浪の穂に照りて
遠野が鶴の面影に
似たりとてはた何ならむ

痛ましきかなわたづみの
ふかきしらべのあやしみに
夜もまた晝もたへかねて
愁にとぞす殻のやど

されど一度あらし吹き
海の林のさくる日に
朽つるままなる牡蠣の身の
殻もなどかは碎けざるべき

樹 蔭

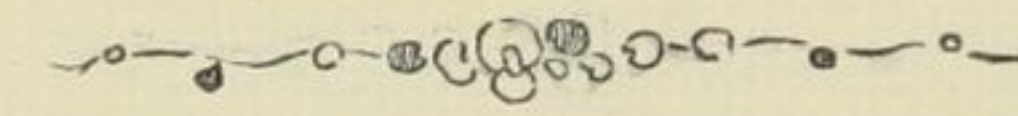
いまだ葉守の神わかく
枝うちかざし風呼べば
わかるる人もしはしとて
夏は樹蔭を慕ふらむ
さればきのふのわが春よ
草ひきむすびやすらひて

若葉かがやくかげにこそ
過ぎし夜がたりつぐべけれ
潜むは何のころぞや
その葉がくれの夢にだに
春よ消えにし花の面
淡げにのみも見えよかし

青野花草

野の路は戀路にあらねども
野草は熱きあくがれに
みどりの夢のそのいきの
はげしく深き夏の野べ
かなたに消ゆる世のかげの
みだれはここにあさまりて

青野花草日にとくる
白銀の音に似たりけり
光は高き洪水に
この時ひとりただよへば
聲も傳へぬ深海の
小舟の身こそをかしけれ
かしこ港やいと清き



おもひぞ泊つる青葉かけ
 かしこ盡きせぬ眞珠を
 さぐるもよしや野のいづみ

戀ぢは野ぢにあらねども
 なやみの草の夏しげき
 かげにもなどや静けさの
 よろこび深き夢のなからむ



枳殻

浪を劃りて磯濱に
 乾ける沙は誰が置きし
 へだつればこそ君が家に
 枳殻の墙恨みしか

雨緑野に鳴り歌みて
 阜月風なく日は蒸しぬ

垣根いといとしめやかに
けふ枳殻の花一重

一重に白き花あはれ
一瓣にこもる夢あはれ
身は卑しくて思ひのみ
繁きわれにはなど似たる

われや佇む夕まぐれ

嘆くと知れる君ならず
もとより門の枳殻の
花をし愛づる君ならず

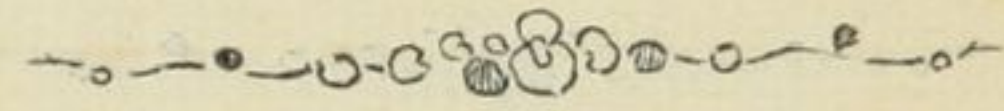
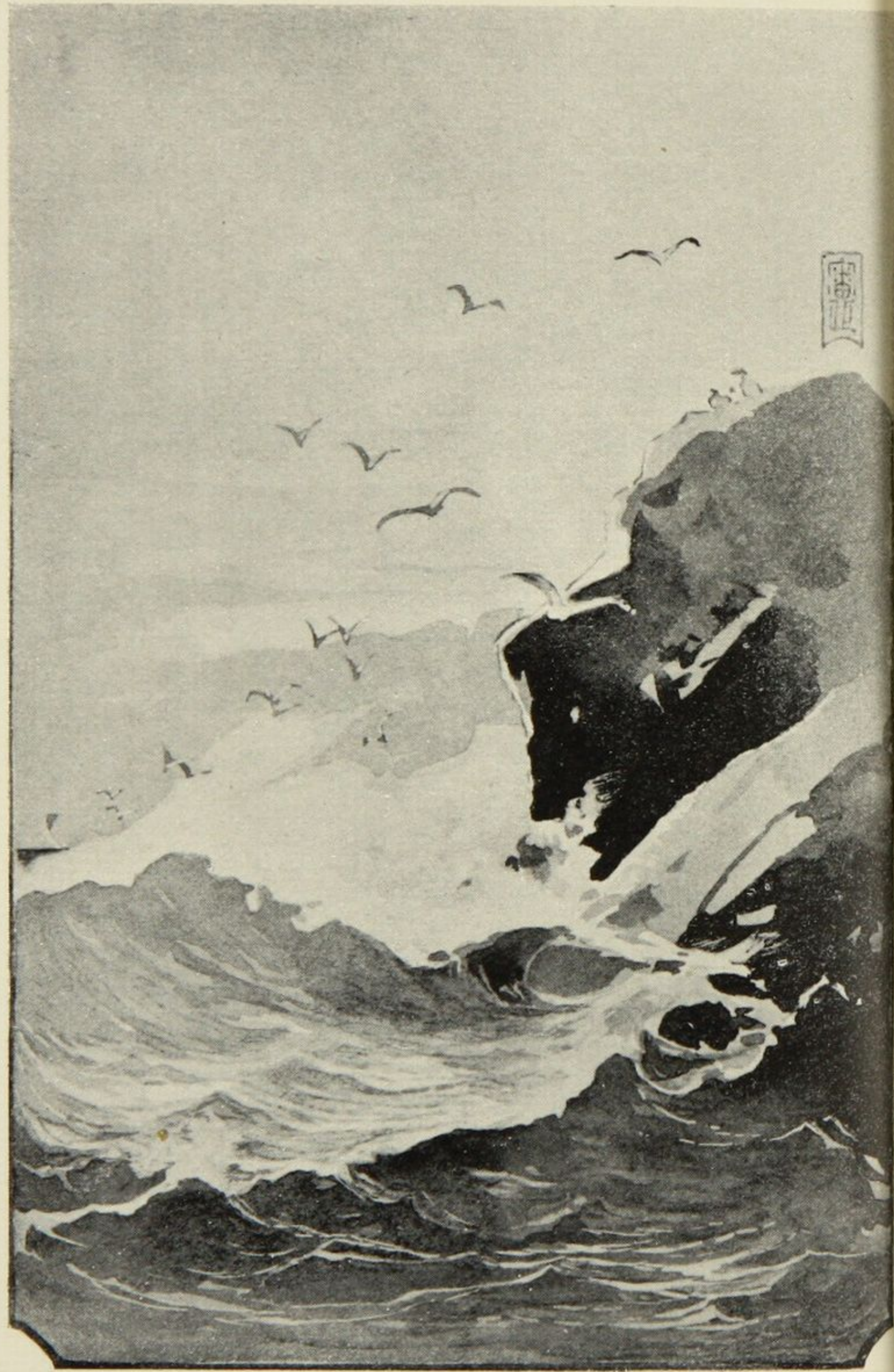
あまりある血をいたづらに
青葉の下に冷さむや
一たび君がにほひある
こころの底を染めてこそ

可憐小汀

鷗に寄する歌

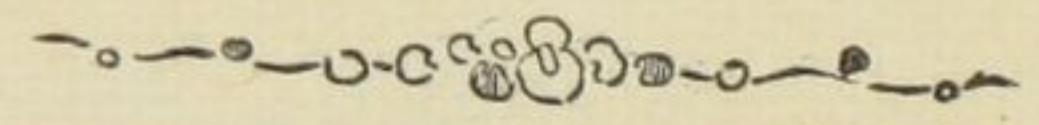
何とはなしにはてもなく
昔にかへるわが身かな
おもふはその日旅の空
すでに三歳を過ぎにけり
その日は海の夕まぐれ

わが船浪に漕ぎくれば
鷗つばさは白くして
ひとり汐げの闇をゆく
苦吟あやめもわかぬ時
靈光頭を射るごとく
鷗よはじめ汝を見て
心竊かに驚きぬ



嗚呼塵染めぬ翅^{つばさ}かけ
 わが身を納^いれよかくばかり
 愁ひはさわぐ激^{おどろ}浪^{なみ}の
 やみがたくしてすべぞなき

鷗^うよ行^ゆ方^{かた}遠^{とほ}からむ
 消え去るかけを惜めども
 可^{あは}怜^れ小^こ汀^{づら}のいづかたを
 汝^なが戀^こふとしも知らざりき



おもひはつきずある夜また

夢に潮うしほの流れ来て

大海おほうみとほくかぎりなき

そのはてをしも慕ひけり

可か怜れん小汀せうていか甲斐かいなくも

問とふはいくたびそもいづこ

八や汐しほ路ぢ難がたき沖おきの上

夢ゆめ浮う舟ふねのすゑ悲かなし

鷗よかくてはてもなく
昔にかへるしばらくは
白き翅にさそはれて
胸ゆらぐこそあやしけれ

菱の實採るは
誰が子ぞや

菱の實^みとるは誰^たが子ぞや
くろかみ風にみだれたる
菱の實とるは誰が子ぞや
ひとり浮びて古池^{ふるいけ}に

鄙歌びんかのふしおもしろく
君なほざりにうたふめり

聲夢こゝろごちほそきとき

ききまどふこそおかしけれ

かごはみてりや秋深く

實みはさばかりにおほからじ

菱の葉のみは朽つれども
げに菱の實はおほからじ

かごはみたずや光なき

日は暮れてゆく短かさよ

なほなげかしなうらわかみ

なさけにもゆる君ならば

君や菱賣る影清く
はしる市路のゆふまぐれ

ろのすがたをば憐みて
ああなど誰かつらからむ

君がゑまひの花かげに
ふれなばおちむ實こそあれ

うるはしとおもふ實のひとつ
いつかこの身にこぼれけむ

旅ゆき迷ふわづらひも
しばしぞ今は忘らるる

あやしむなかれわれはただ
なさけのかけを慕ふのみ

さながらわれは若檻の
枝に來て鳴く小鳥のみ

ゆふづつ

「祈禱あげよ」と星の界の
少女の一人その聲よ
愛の泉のしたたりや

その聲よまたさながらに
聖なる小河うち掩ふ
蘆葉さやぎのひめごとや

その聲音こそすみわたる
光の海の遠浪の
天いと深く傳ひゆけ

『いざ祈禱をぞ榮おほき
つとめ』といへばひざまづく
靈の身かけのまた二人
一人は高きよろこびに

黄金彩雲とほ空の
底にかがやく色を讚め

一人は残る愁ひより
紫濃雲故里の
界をしまとふとなつかしむ

二人おもはずかしこそ
ああ夕まぐれわが界はと

言はむのまどひさてやみぬ

祈禱はつひにつとめはて

高榮めぐる聖燭の
焰もここにともされぬ

見よ聖燭の火は生ひぬ
熾りぬ照りぬ(嗚呼何ぞ
人の世われに夕短かき)

夕かげ

かの紫の夕雲に

かの黄昏のさびしさの

あふぎ見るだにたへがたき
いろこそ深く染めにけれ

彩ある雲に慕ひよる

愁ひの影の夕暮の



魂の少女のくろ髪の
にほひもあらぬ空のうへ

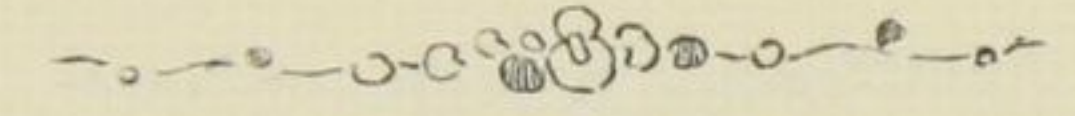
我が胸にしもさらばまた

黄金の色のかはりはて

追憶つらきかたみなる

みだるる髪のかからずや

みだるる髪はかかるとも



わが手にさぐるちからなく
ひとりもだゆるころより
ただ大空をながめけり

沈むころの海原の

浪の響はさはあれど

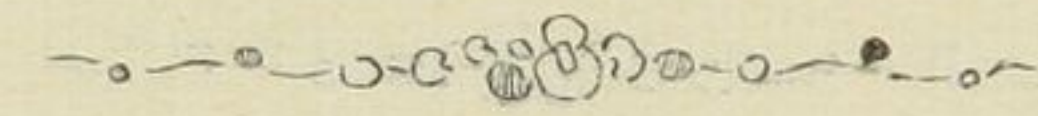
聞なる痛みたへがたく

聴かじとするにすべもなし

わかき血潮はしづみゆく
わが身にもなほ戀あらば
高きみ座くらにかなしみの
聖み燭あかし添しへむわがねがひ

問ふをやめよ

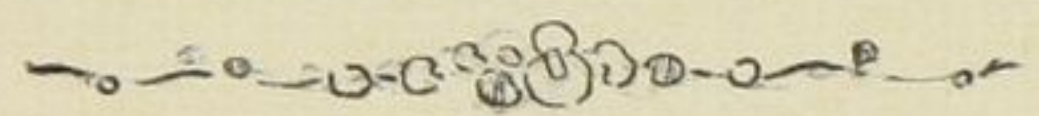
かがやきわたれる星のかの界ま
いづれの光もいと慕はし
さはあれひとへにわけてめづる
ゆかしき影こそ胸は照らせ



いろ彩いろざねとなふ虹のごとく
そのかけ天あまより地ちにわたり

すぎにし歡樂よろこびいにしうれひ
やすみの園その生まに夢をさそふ

かたらひ契りし少女の名に
夜よごとよびさます星は照らす



少女せうじよはうせしや墓はかはいづこ
わが星いつれと問ふをやめよ

憂 愁

はてなき空を流れ去りて
星の光も消ゆるごと
愁ひのかけは時として
胸深くこそおちにけれ
わがよろこびは新草の
野べとしおもふその目だに

命の榮の花もなく
夕影などや沈むらむ

愁ひのかけは掩ひ来て
闇となる身のはかなしや
幾世なやみの羽音さへ
さても聞きしるわがころ
げに人の世のことわりの

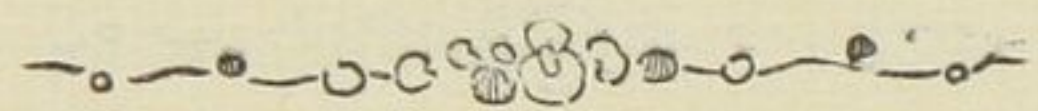


深きにほひもたそかれて
浅瀬すべなきわづらひの
流に夢はみだれけり

魂の身かをる桂かけ

天なる光戀ふれども

身はいたづらに沈みゆく
卑きなやみをいかにせむ



かたみの星

光はにほふ天の香を

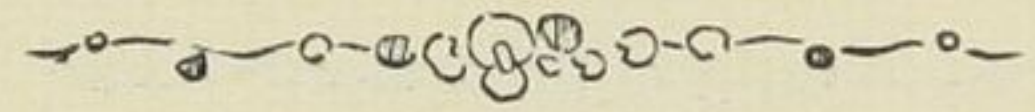
慕ひしたひしたのしさに

薔薇の宮となづけつつ

めでにし星も墜ちてけり

こよひは清き愁ひより

うるほひひらく影見れば



百合の宿座とよびかへて
ふたび空にあくがれむ

追懐深きかがやきぞ

迷ふわが身のたよりなる

さればよ照らせ荒磯に

また闇沈む墓かけに



追憶

光かすかに日は落ちて

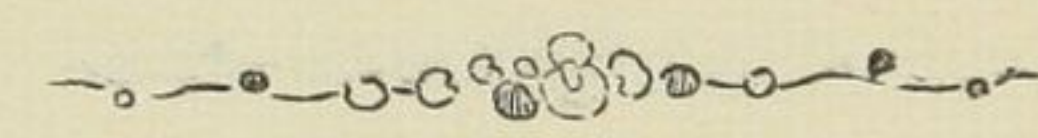
愁はせまるゆふまぐれ

またうちさわぐわが胸の

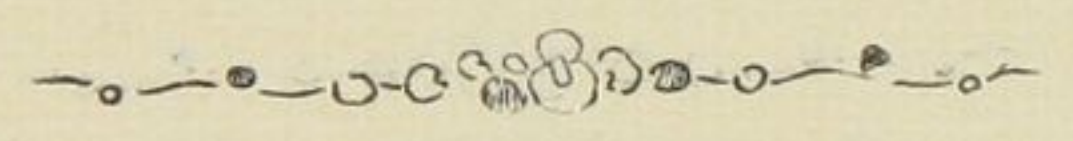
ものおもひこそあやしけれ

つつむは何のころぞや

憶ひいづるぞさてはよき



夕ゆふなごりのしづけさに
 しばしはあはき影ひけよ
 野あけぼのの曙あけぼのをわれ趁おぼひて
 醉まひて過ぎしも夢なりや
 さしもつつみて何かせむ
 憶おもひいでずばかひなしや
 ただかりろめに星ほ讚ほめて



ただ麗うらしき入いすぞし
 ほのぐらき路みちふみゆけば
 熱あつき血ちしほも冷ひやえにけり
 さあれつつむに忍しのひむや
 憶おもひづればたのしきを
 樹き杪すゑわかるる光ひかりこそ
 雲くもにかくれてゆきにしか

今宵は昔たへはてし
清きしらべもかへり來よ

つつむといふもころから
あまたおもひいでてまし

嗚呼かの野邊のかたらひや
その幸常に盡きざれば
よろこびの華褪せずして

生命の草もにほふなり

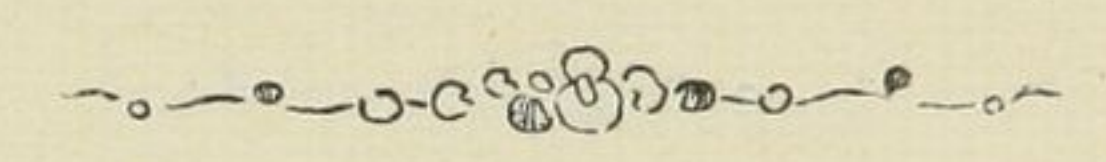
つひにつつむにたへがたし
おもひいづるぞさてはよき

かすかに胸に

かすかに胸にけふはまた
むかしの海の響すと
ひとり寂しきうたがひに
山邊の翁つぶやける
山邊にかくは齡老いて
遠きおもひもあらざりき

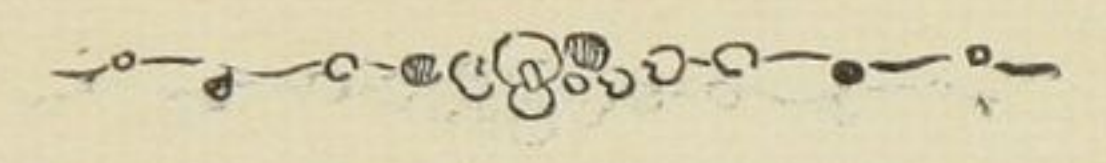
今日しいかなるたはむれぞ
翅は生ひぬわが夢に

雲に彩あり高嶺なる
あらしき巖をつつむとき
榮よ樹かげをはなれゆきて
夢の翅ぞ匂ふなる
憂さいぶせさは谷の奥



かくて忘れつ故郷を
 かなたに今はひたすらに
 海の響をきかむとす

幽かなれどもわかやかに
 漲りわたる大海の
 その音なひよ歡びの
 わが日むかしの歌の聲



觸れてこそまたなつかしみ
 ふるるによけれ何日までも
 されとわが世の磯濱に
 浪はひとたびすぎしのみ

浪は碎けてすぎけれど
 今はた聞けば後の日の
 すさめる胸の追憶に
 海のひびきのゆかしきを

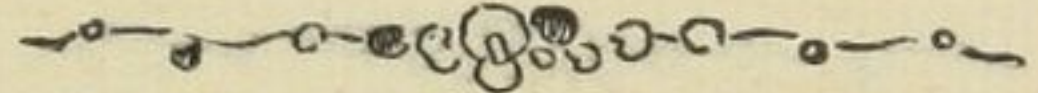
何今更にたゆたひて
夢の翅の衰ふる
獨りかくてもおくつきに
とくいりはてばいかにせむ
嗚呼また一重しほからき
狭霧ひらかむ夢もがな
舊の渚のさのみやは
いつまでわれに見えぬらむ

白晝のをりの眞砂路に
潮の華の明らかに
映りしさまを戀ふれども
つらくすべなくなりぬめり
嗚呼堪へがたし遠海の
とよみむなしく聴てあれば
そは似たりけりかの媚に
あだなる人の私語に

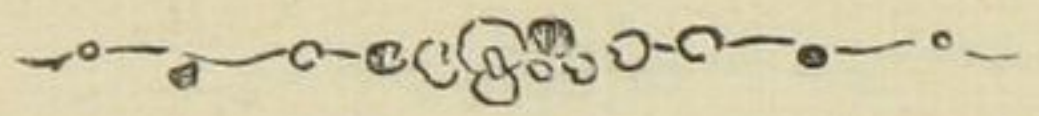
すべて忘れてありつるを
夢よいかなるいつはりぞ
翹もついに沈むまに
をぐらくなりぬ空のはて

草莽燕頤

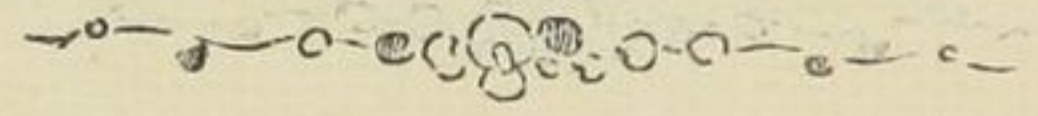
よろこび
なれがゆらめく高むね
大海原にゆきめぐれる
潮なれやさこそ
光にみちてもあふるるなれ



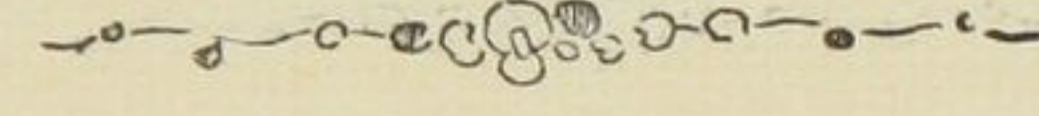
よろこび
 なれがにほへる唇くちびる
 かの曉あけに天あめあけゆく
 焔えんなれやさこそ
 熱あつき絃いんふるへ音ねにたつなれ
 よろこび
 なれがすがたや何なる
 望のぞみに照あれるそのよそほひ



さればさればさこそ
 いといと高きをただふるなれ
 東ひがし方
 ここに國くにするよろこび
 高たか日ひ繞めぐれる黄金こがね御座みくら
 ああ誰かはこのに
 み座くらのほひを仰あががざらむ



くにたみ
 われらささぐる讃歌
 せめて眞白き翅とらば
 あお御輦めぐる
 この日の榮もて天かけらむ
 よろこび
 なれがねがひはくまなく
 かがやく幸やそのもろごゑ



さればさればさこそ
 いといと高きをただふるなれ

高潮

曙のうた

漲みなぎり披ひく千重ちぢゅうの浪
憊つかるる色は更さらになし
擁かかるは勁きんく張はりし琴
音ねの高たかきに副そへばなり
深ふかき遠とほきを問とはずして

胸むねによろづの聲こゑを籠かごめ
夜よを傷いたみて夢ゆめおほき
人ひとの世よの岸かた洗すすひ去いる

曙あけぼのに海うみ鳴なりわたれ
鳴なりわたれ海うみあけぼのに
磯いそうち湧わきてあがり
溢あふれて沙すな噛かめよ

曉の星もふぎ見て
舒びていざよふ雲の君
にほひ含める唇に
讀むるは朝の光なり
曉の空いと清く
明けゆく雲はやすらひて
彩ある榮の光こそ
その胸にしもうつりけり

曙に風吹きかへせ
吹きかへせ風あけぼのに
高きに光纏ひ
微かに淨く拂へ

愁は谷の霧なれば
思ひは暗き澤がくれ
かなしみ細くいと苦き
小草を把りしわが身さへ

高潮満ちて繞りゆく
海のほとりによみかへり
雲は匂へる朝ぼらけ
生るる靈の幸想ふ

曙に海鳴りわたれ
豊かに遠く湛へ
流れて岸に觸れよ

海に映りつ輝きつ
雲あひ牽きて影逐へば
母なる地の歡樂に
塵もこの時また聖し

流轉よ暫時たちかへり
翼收めて虚空に見よ
野の花わかき髪に添ひ
森の香健き胸に入る

曙に風吹きかへせ
 吹きかへせ風わけほのに
 極より極に過ぎて
 天より地に下りよ
 重なる歳月は移れども
 忘れぬ日は稀なりや
 古来の典籍を繕きて
 世をば激せし蹤を見よ

無憂樹の蔭華饒く
 馬槽の邊に星照らす
 嗚呼その法の曙の
 光もいつか影歛め
 傷みてひとり嘆きつつ
 懐疑の途人走る
 奔放なれかかる世や
 熱慕情にただ嚮へ

微闇き空いかばかり
雲華やかに染め來ずや
うち咽ぶ海またここに
潮ふたたび満ち來ずや
然らずや高き遠き見て
明けゆく磯にわが立ては
この曙に白銀の
獵箭弓弦を斷つがごと
雄々しき魂の生れいで

この曙に琴のねの
祝ひの歌を曳くがごと
やさしき魂の聲あげむ
われ今清き曙に
色と香を慕ふ時
おのづからなる命こそ
活きて極なく流れゆけ
響は浪に高くたち

光は雲にたなびきて
嗚呼この清き曙に
風吹きかへせ浪鳴りわたれ

草わかば完

100



明治三十四年十二月廿八日印刷
明治三十五年一月一日發行

定價貳拾五錢

不許
複製

著者 蒲原隼雄
發行者 佐藤儀助
印刷者 佐久間衡治
印刷所 東京神田區錦町二丁目六番地

發行所 東京神田區錦町二丁目
電話本局二八五二番
新聲社

株式會社 秀英舎第一工場
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

新聲の韻文

『新聲』は青年文壇の中堅を以て天下に許され、評論、小説、美文等、皆一代に雄視するものなりと雖も、就中新詩は蒲原有明子選評の下に天下の俊髦こゝに集り、清新の想、幽邃の調、獨り本誌に光彩を放つのみならず實に文壇の偉觀たり

壬寅初刊第一號

掲載韻文要目

新鶯曲 蒲原有明

海城 尾上柴舟

群星 嶋村露花

罪 中野紫紅

海への朝 内田夕闇

(青年諸子の投稿を歓迎す)

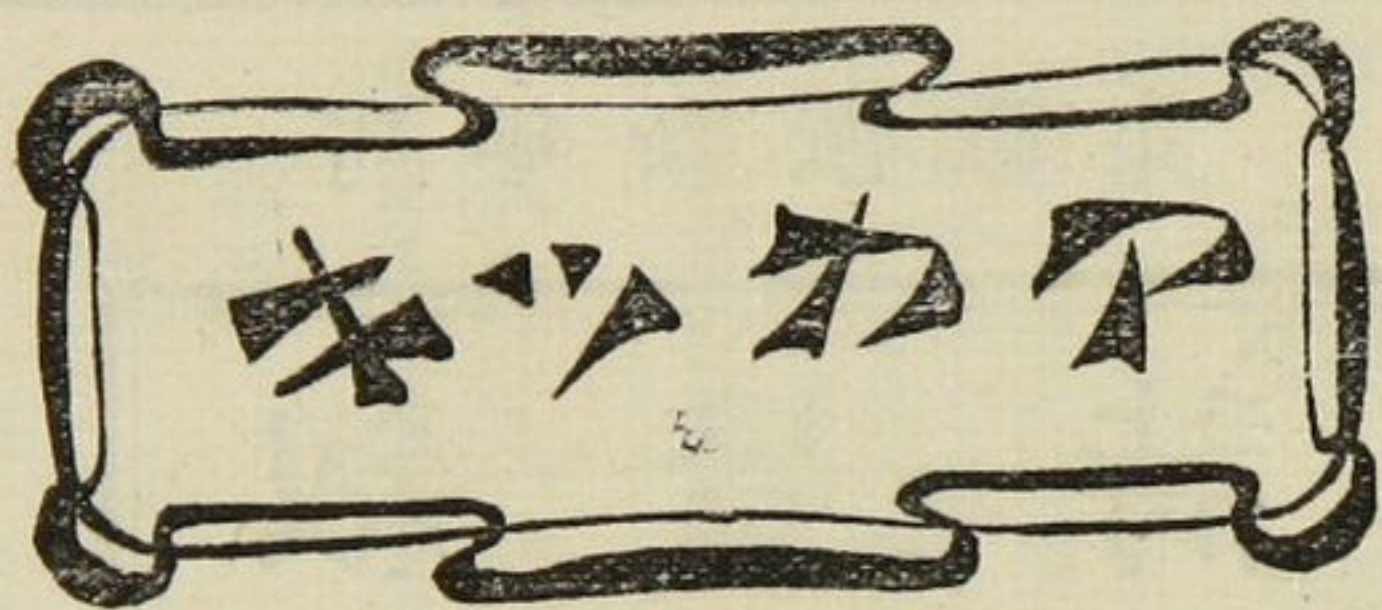
新聲社出版圖書要目

明治三十五年一月一日現在

新聲社販賣部

第壹編

元旦發行



小栗風葉君著

新作小説 梢の花

大判百餘頁
定價十八錢
郵税金四錢

表紙……アカツキ(石版十遍印刷)……一條成美君筆
口繪……野外の訣別(寫真銅版三色印刷)……渡邊審也君筆

可憐梢上一枝花の花、戀を與へて戀を奪ひ、芳芬空しく地に委せしめんとしたるものは、是れ奇險ある時代の思想ある也。「梢の花」は、實に群小作家が沼々風を逐うて纖巧猥雜の作を列ぬるの時、獨り自ら進んで此時代の思想を描けるもの、着想最も大膽、且つ斬絶。文字絢爛を極めて人をして戀の芳香に酔はしむ。

アカツキ 是月刊の新作文庫也、最も進歩せる思想を描ける小説又は美文(百頁以上)を掲ぐ、表装挿畫亦之に遜らざる清新の趣致あるもの、み也。

定價一部十八錢郵税金四錢……六冊前金郵税共金一圓二十錢

『草わかば』の讀者は、左の目錄中特に『ハイチの詩』に注意せられんとを望む。ハイチは獨逸叙情詩人の尤なるもの、其詩清新にして奔放、可憐にして多趣、我韻文家のとりて師となす可きもの多し。尾上文學士其豊富の詩才と流麗の筆致とを以て之を譯して世に問ふや、大に讀書界に歡迎せられ、初版二句にして盡き、再版發售するの運に至れり。即ち茲に一本を『草わかば』の讀者に薦む。

每日新聞主筆 島田三郎君序
 國民新聞主筆 德富猪一郎君序
 文學博士 高楠順二郎君序

大日本文章會章版

能文大成

總金 千七百頁
 類紙 數百
 美本 數百
 入字 數百

講述者
 文學士 大町桂月
 文學士 久保天隨
 文學士 內海月杖
 文學士 十時彌
 文學士 杉時敏
 文學士 江藤桂華
 文學士 大沼鶴林
 文學士 山川芳則
 其他數名

定價二圓六十錢(目方八百) 勿送包送
 此際申込者には小包料全免
 * * * * *
 本書は一流の名家が、各専門の智識を傾倒して、能文の眞訣を説きたるもの、一讀よく文章の蘊奥に通ずるを得可し購讀者には本會生徒の資格を與へ文章無料添削の特典を與ふ

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
 文章作法 能文要訣 文章百話 文法解剖 日本文典 修辭學 審美學 美辭類纂 日本文章史 日本文人傳 名家文粹 新聞學講義 國文評釋 英文評釋 漢詩評釋

在大學院文學士 久保天隨君著述

東西文豪評傳 (卷壹)

全一冊

定價廿五錢 郵稅金四錢

弱者の聲

弱者の名の下に權利は壓せられ、狂屈伸ぶるに所なき者に代りて、其筆となり、其舌となり、大叫喚、大絶叫、之を天下に訴へ、且つ彼等一道の慰安を與ふ。

掲載目次

牢獄に接近せよ 作者の福音
 富者 貧者の慰安
 紡績の女工
 弱者の憐愍
 可憐の幸也
 貧しき者の名
 弱者の奴隸

田口柳汀 正岡梅溪 高須村葵山 西村醉夢 生田梅溪 高須村葵山 奧村梅溪 正岡梅溪 高須村葵山

價十二錢 郵稅四錢

從軍記者 佐藤紅綠君著述

從軍 決死隊

從軍畫家 石川欽一郎君畫

價廿五錢 郵稅四錢

著者昨年北清の戰に從ふや、四名の同志と決死隊を組織して、今其矢石の間を親しく戰を觀る、其光景宛と脱しての文を以て之を挿畫す、其奉り川從軍畫伯の天覽たるも石

山口中將、福島少將題 渡邊男爵、諏訪子爵題

矢崎少尉

身に卅創を被りて北京城外に斃れたる青年武人の典型 價廿四錢

高等師範教授
在大學
文學士
尾上柴舟君譯著
（第二版）

ハイネの詩

卷頭、ハイネの肖像（寫真版）
頗美本 定價二十錢
郵稅四錢
附錄、ハイネ評傳（三十頁）

戀の征矢に胸を射られ、薄倖の命運に身を悲しむ者は、來りて「ハイネの詩」を誦せざや。ハイネは獨乙叙情詩人の尤あるもの也。その詩優麗にして輕妙、裡に炎ゆるが如き情熱あり。戀を歌ひ、人生を歌ひ、運命を歌ひ、乙女を歌ひ、故國を歌ふ。柴舟氏滿腔の精力を傾倒して之を譯す。蓋し獨乙詩人の詩集翻譯の嚆矢にして、短歌新體詩の作者を諷するとの大なるまきは勿論、一般文壇に志を寄す者的好侶伴也。

懸賞詩文集 桂花集

掃落彩接花
畫葉虹木園
一條成美君筆

「新聲」紙上、賞、百金を懸けて弘く募集したる小説、美文、論文、詩歌、俳句、等を掲げたる者。天下の俊髦此の一卷に集りて、青年文壇の偉觀也。

附錄
雁影 金子薰園 全定價
ちぎれ雲 田口翔汀 一十二錢
題桂花集 高須梅溪 冊五錢
亡國の韻 正岡藝陽 冊四錢
遊仙窟と紅樓夢 奧村梅阜

正岡藝陽君著

（大判全一冊 * 定價貳拾五錢 郵稅四錢）

嗚呼賣淫國

卷頭 寫真
新橋梅香 伊藤博文
市村家橘

次 目

賣淫國とは何ぞ 醜業婦を有せる社會 賣淫學生 賣淫の首府
當代の淫猥作家 牡丹侯を戴ける社會 賣淫文學 田園の淫風
優柔不斷の社會 奇怪なる賣淫の現象 姦淫詩人 モルモン宗
其他 數項

新聲社同人著

明治文學家評論

次 目

三宅 雪嶺 福地 櫻痴 島田 三郎 岩本 善治 江見 水蔭
竹越 三又 内村 鑑三 幸田 露伴 田口 鼎軒 國府 犀東
高山 樗牛 松村 介石 山路 愛山 大町 桂月 田岡 嶺雲

表紙畫 全一冊 定價三十錢
百穂君 郵稅金四錢

高須梅溪君著
平福百穂君畫

暮雲

價十二錢
郵稅四錢

梅溪子の美文は、優に文壇を横行するに足る。其辞の清麗、其想の秀雋、誰かよく比し得るものぞ。(製本已成)

次 目 雲 暮
澱江を懐ふ 鐘 聲
暮畔の懐ひ 夕 陽
御茶の水橋 曙の星
海のほとり 牽牛花
風の音づれ 幻 影
秋の追憶 深 林
夏の田園 少 女

空前の美本

一 〇 一
一 軀裁新奇、本文色刷
用紙舶來上等光澤紙
袋、表紙、扉、挿畫色刷
印刷製本等精巧を極む

多恨の遊子、身は獨り、一壺の酒を友に湘南に遊ぶこと旬日、滿囊の詩想を披いて此著あり。景情双絶、詞彩煥發、一卷是れ無韻の詩、とりて水晶盤裡に盛るも可也。軀裁美を極め麗を盡くして、我が明治文壇有數の傑作を遇するの微衷を現す。

川上眉山君著

定價廿六錢
郵稅 四錢

ふところ日記

一條成美君畫

文 學 士 寺 內 至 誠 君 述

新 婦 人 觀

第一 婦人の使命

佳人讀書(色刷)

一條成美君畫

鳩山春子夫人肖像

第二 婦人美觀

小女(色刷)

一條成美君畫

(洋畫) ラファエル筆

月刊婦人叢書 ◎定價

一部廿五錢 六部一圓四十錢
郵稅金四錢 每卷讀切

第三 女學生

女學生(色刷)

一條成美君畫

第四 社交の女王

近刊

正岡藝陽君著述 (増補第四版)

時代思想の權化 星亨

大判 定價廿五錢
洋製 郵稅金四錢

一代の梟傑星亨、彼は已に歴史の人とされり。嗚呼五十年の長き歴史は、いかなるものを吾人に教へたる乎。藝陽子、彼を以て黄金權勢の外何物もなき明治時代思想の權化なりとあし、縦横、其人物性行を論ず。觀察奇警、論斷的確、殊に世人の未だ知らざる星の平生を紹介する所趣味極めて多し。

南風館編輯部編 (小説集)
鏑木清方 平福百穂二君畫

まごも集

定價三十錢
郵稅金四錢

次 目
● 二人の海
● 一節切
● 道すから
● 浮萍物語
● 尾花が濱
● 春葉
● 春雨
● 葵山

正岡藝陽君著 (第二版)

新聞社の裏面

定價郵稅
共貳拾錢

社會の秘密を摘發する新聞社には、いかなる秘密が籠れる。白聖の大館其門戸を固うして容易に人の窺ふを許さず。唯茲に秘密の鑰を握れる者藝陽子あり、縦横の筆、最も詳密に、最も痛切に、其秘密を發き、私行を暴露して剩すなし。

大町桂月君序 小林柳村君著 (五版)
一條成美君畫 山中古洞君畫

戀愛と文學

全一冊美本
定價貳拾錢
郵稅金四錢

戀愛!!!あれ實に人間最高の情想に非らずや。人世あれが爲に趣味あり、之が爲に平和あり、「戀愛と文學」ありて、亦長く青春の子女を慰む可し。行文艶麗、卷中の佳所は、朗々高く歌ふに足る可き者あり。

正岡藝陽君著 (六版)

婦人の側面

全一冊美本
定價二十錢
郵稅金四錢

世、本書の如く大膽に婦人を解剖したるものなく、本書の如く公平に婦人を論評したるものなし。流麗快暢、趣味渾くが如き文字の間に、婦人の光明と闇との両面を説明し盡くして、亦遺憾なし。

白露集

(總クローズ願美本)
文學士 久保天隨君
文學士 淺野馮虛君
文學士 戸澤姑射君
中村不折君 畫 四版
下村爲山君 畫 版
(定價參拾錢 郵稅四錢)

此集は、戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を描きたるもの也。人生の運命を知らんとする者、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繕け。若しそれ其文に至りては、誠に當代の絶品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、煥然目を奪ふ。

新 作 小 說

新 婚 旅 行

德田秋聲君
生田葵山君
田口掬汀君
西村渚山君 著

全一冊洋裝
插畫四色刷
定價卅五錢
郵税金四錢

結城素明君
一條成美君
平福百穂君
渡邊香涯君 著

田山花袋君著

野の花

定價三十錢 郵稅四錢

我に初戀の佳人あり、半生の苦
樂共にせんと、心に誓ひるしに、
斗らざりき、我を懷うて日夜懊
惱、身神衰へ行く少女あらんと
は。其人賢にして美、殊に振分
髪の幼馴染あるに至りては、情
緒いかで亂れざるを得可き、嗚
呼都べての障礙を排して、清き
初戀を保つは是乎。我爲めに不
遇の戀に泣く人の情を受くるは
是乎。這般戀の惱みを描けるも
の、『野の花』の一卷とす。行文
綿麗にして描寫精細。

新聲社同人作

青 葉 蔭

全一冊再版
定價拾五錢
郵税金二錢

夏の野邊 蒲原有明 ● 夏の田園 高須梅溪
夏の都府 田口掬汀 ● 夏の水草 金子薫園
夏の深林 正岡蕨陽 ● 夏の海畔 西村醉夢
夏の追懷 奥村梅臯 ● 夏の放言 崑崙山客
表紙百種
繪口紙百種

妖堂居士著

文 壇 樂 屋 觀

定價拾五錢
郵税金二錢

文壇の下げ幕切つて落せば、捧腹すべきと極めて
多し。妖堂居士例の鼻の如き眼を以て、闇中捕捉
し得たる幾多の奇談珍話を、流麗ある快筆に彩り
て、之を世に傳ふ、一章一話、趣味溢るゝ斗りに
して、讀過一再、塵情忘却し去るべき也。

大日本文章學會編纂

文 章 形 容 辭 典

附錄 文章雜話

本書は古今の文學書
類より出所出しき形
容語を集め、題に
よりて分ち、順に
從つて次第し、難
解の句には、一々
明細なる註釋を附
せるなど、用意極
めて親切也。此書
を机上に置く時、
形容の辭句に苦む
ると、筆端窘束す
るの患をかゝるべし。

定價參拾錢 郵稅四錢

わ か 草

定價郵稅
共貳拾錢

春雨、烏水、葵山、梅溪、薫園、
醉茗、露葉、荷葉、花外子等の
小説美文を收めたる者。

森鷗外先生序文
大下藤二郎君著 〔六〕 質問自由

水彩畫の葉

全一冊袖珍 定價二十錢 郵税金四錢
丁寧懇切、微を穿ち、細を明かにし、毫も素養なき初學の士をして、尚ほ且つ其堂奥に入るを得せしむる寶典也。各學校の修畫參考書として續々採用せらる。

河東碧梧桐君著

俳句評釋

全二冊 定價卅五錢 郵税金四錢
俳句は詩形の短小なるが故に、簡警朦朧を主とし、餘情を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るが故に、解し得可からざる者極めて多し、本書は此缺點を補ふものにて、古今の名句を選ひて、丁寧懇切なる註解を加へ、且つ嚴正なる評論、其價値の存する所を明かにす。

河東碧梧桐君序
大橋文學士序文 寒川鼠骨君著

斷霞錄

全一冊洋裝 定價廿五錢 郵税金四錢
青山白雲と市井紅塵とを問はず、輕妙洒脫の筆を以て縱横に描く。而して其描寫の精細ある、厘毫の微尚は遺さずして、讀者をして身親しく其境に在るの思あらしむ、夏季臥遊の友となすべし。

緒方流水君著

塵影錄

全一冊再版 定價參拾錢 郵税金四錢
流水君の論議最も大膽、忌む所なく憚る所なく、恨を天下に買ふを辞せず。觀察極めて奇警、常に他に一步を先じて縱横の抱懷を吐く。「塵影錄」はれ明治文學の側面觀ある也。

新聲社同人著 (第四版)

三十棒

定價二十錢 郵稅四錢
『大坂毎日』批評 勇往の文縦横筆、氣焰天に揚るの意氣あり、この抱負ありて、以て文壇に馳騁するに足る、亦一讀すべき好冊子也。

墳墓

定價二十錢 郵稅四錢
本書は人生の安息所とも云ふべき墳墓を描きたるもの、文字流麗、金聲にして玉振、まさに朗々高く歌ふ可し。

二版出來

露伴 柳浪 眉山 魯庵
水蔭 宙外 鏡花 風葉
抱月 天隨 鳴雪 直文

本書は上掲十二家の談話を輯録したるものに、創作の苦心を歴談あり、作者の氣焰あり、對するの興味多きは、論なしと雖も一面に於いて小説作法を和歌俳句の作法を作者の経験に照らし、説けるものなれば、創作上の参考書として他に比するものなかるべし。

創作苦心談

再版出來
○定價貳拾錢 郵稅四錢

不知庵 柳浪 鏡花
萩の舎 鳴雪 風葉
水蔭 及其庭園

青年文壇の堅中

新聲

月刊文藝雜誌

新聲は文學美術の巨匠に
 文、韻文、雜錄等。『主張』欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ「人物」の文士月旦と、文壇風聞記とは、他に比を見ざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。「餘材」の甘言苦語には、一は文壇の者鋭刀を揮うて辻斬を試むるあり、言、文學美術の演劇の各方面に亘りて百人百様の觀察、亦一代の奇觀也、其他の諸欄皆青年文士の熱血にあり、一篇一章三編に價せざるは、大に美術的趣味を鼓吹せんが明、一昨成美、平福百穂。繪畫を每號十數面を掲け、其他新派畫家の筆に於ける繪畫を泰西の畫名畫の肖像を載す。而、繪畫を寫真銅版に製して出、時々の鮮明に如し。『新聲』旭日の天に朝する勢を以て文壇を横く潤歩が今、新聲の天に朝する勢を以て文壇を横く潤歩に
 定價 一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢
 郵稅一部一錢、○每月一回十五、定期發行○

全六部冊完成

評釋叢書

定價	第一部二十錢○六部前金郵稅 共金壹圓四十錢○各編讀切	第六古詩評釋	第五英文評釋	第四國文評釋	第三俳文評釋	第二漢文評釋	第一漢詩評釋
		久保文學士著	淺野文學士著	內海文學士著	阪本文學士著	久保文學士著	久保文學士著

青年文學叢書

第六青年文學	第五韻文作法	第四論文作法	第三美文大要	第二美文作法	第一文學攻究法
--------	--------	--------	--------	--------	---------

米藤江 全部六冊一十錢郵稅
 國華君 六部前金郵稅
 文學士著 共六十錢

農學士 柳内蝦洲君著述

學生叢書

全部十册 每月一回發行 定價 一部十八錢○郵稅四錢。 十部郵稅共壹圓九拾錢。

每日新聞主筆 島田三郎君序

第一 廿世紀の學生

訂正再版

世紀一變、舞臺は二十世紀に入りて、日東帝國の面目將に一新せんとす。此間に處して、名を擧げ業を成さんとする學生は、いかなる道を辿り、いかなる方向に進む可き乎。『二十世紀の學生』は一卷十章、之を説き、之を教へて亦餘蘊なし、加ふるに文辭流麗、論旨嶄新、彼拙劣無趣味なる文字を以て學生を教ふる世の教育者先生と同一の比に非ず。今回再版出來す、弘く閱讀を待つ。

農學士 志賀重昂君序

第二 東都と學生

附 東京學
錄 校一覽

東都は果して學生の天國なる乎、はた墮落の階段なる乎、東都十萬の學生皆之に惑ひ、地方負笈の志ある者亦之を疑ふ。本書は東都の學生の内情、及び其周圍の實狀を明叙して、一毫掩はず。在京の學生を規し、鼓吹し、獎勵すると共に、上京せんとする地方の青年の心得を説くと詳細を極む。巻端、志賀重昂君の學生に關する論文を掲ぐ、滔々數千言の大文字。

青山學院總理 本田庸一君序

第三 學生と生活 既刊

東北の奇傑、教界の偉人本田庸一先生は本書に序して曰く「苦學といへる事は現時の一問題となれり、之に向つて説くもの日に多きを加へつゝ、あるは喜ぶ可しと雖も、よく學生社會の狀態に照し、學生をして安じて自活獨立せしむるの法を講じたるものに至つては亦見る可からず、柳内農學士の近著『學生と生活』はよく此缺點を補ふもの、時の必要に對して一の好資料を給せる也」云々。

米國哲學博士 淺田榮次君序

第四 理想的學生

附錄 秋の詩美

今日學生に關する書籍乏しからず、唯それ「理想」と云へる高遠なる問題に向つては、筆を附くるものあるなし。學生は、如何なる理想を抱いて、學窓に在る可き乎、筆は如何なる人物を理想とすべきものなる乎。本書は筆を此二問題に染めて、理想の尊む可きものなるを説き、學生の理想的人物として尊崇すべき偉人を擧ぐ。文辭例によりて流麗平明、一讀よく此大問題を解するを得可し。

辯護士 花井卓藏君序

第五 學生の將來

既刊

學生の將來は、學を卒へて名を社會に現はさんとするに在り。之を達せんとせば、其目的の選擇を嚴にし、自己の資質のよく其業に適するや否やを研究せざる可からず、學生の失敗に終る、多くは、此二問題を閉却するに在り。本書は最も親切に、最も懇篤に、最も適切に、之を説くと詳細を極む。學生諸子若し熟讀著者の意に悖るとなくんば、必ずや將來の方向を誤ることなかる可し。

學生叢書號外

文學 實業 貧兒成功談

全一冊 定價貳拾錢
本一篇 郵稅金四錢

貧兒力行圖 (色刷) 一條成美君畫

逆境の下にある青年諸子、諸子は徒手空拳、名を成し志を遂げんとせば、業に勉め、學に勵むの傍ら、先進苦學の跡を尋ねて、習ふ所なかる可からず。是れ實に、成功の最大捷徑なれば也。本書は現時知名の某々二氏の、一經歷談にして、一は苦學力行、あらゆる障害を排して、文學博士の榮冠を得、一は歴談にして、一は重ね、經營辛苦、遂に實業界の大立物たるに至るの徑路、眞に絶好の立志篇也。而も小説的に縦横描き去りて詩味横溢、知らず、の裡に無限の教訓と、無限の趣味とを得可し、切に學生諸子の一讀を待つ。

第六 學生の立志

豫告

三十五年一月十日發行

注文規定

右目録中に掲げざるものは、總へて品切とす。増版出來の際は更に廣告す可し。

注文は一切前金とす、郵券代用は一割増たる可し。

注文書籍中、品切のものあるときは、直ちに其旨通知すべきにつき、購讀者は他の書籍に変更せらる可し。

送附の金圓に剩餘あるときは、返金の煩を避けて、金圓相當の圖書切符を發行す。購讀者は次回注文の際、代金の中に加へて送らる可し。

返信を要する時は、往復端書又は返信郵券封入するを要す。

注文狀の宿所氏名は、正楷にて認められたし。字躰亂雜あるは書籍不着の原因とあると多ければ也。